

坂口安吾は なぜ木村義雄を書いたのか

本多俊介¹

祖の文学」〔新潮〕一九四七年（昭和二十年）六月。その二人の対談「伝統と反逆」〔季刊作品〕第二号（四八年夏号）の133頁まで。小林は〈木村名人が敗ける話〉、安吾は自らの〈将棋の観戦記みたいなもの〉を共に褒めた。その場の戯れ言と斬り捨てていいものだろうか。

安吾が観戦記を書いた対局は次の通りだ。実質的には将棋観戦記しか書いていない。

（1）第六期名人戦第七局 ●木村義雄名人対○塚田正夫八段
（一九四七年（昭和二十年）六月六日・東中野「モナミ」）

※四勝二敗一持将棋で塚田が奪取。

（2）木村升田三番将棋第一局 ○木村前名人対●升田幸三八段（四七年二月九日・名古屋市「葵荘」）

※第二局は升田、第三局は木村勝ち。

（3）本因坊・呉清源十番碁第一局 ●岩本薫和本因坊対○呉清源八段（四八年（昭和三年）七月七・九日・小石川「もみぢ」）

※呉の七勝二敗一持碁。

（4）第八期名人戦第五局 ●塚田名人対○木村前名人（四九年（昭和二十四年）五月二四日・皇居内「済寧館」）

※唯一の名人戦五番勝負。三勝二敗で木村が奪取。

安吾は（1）の観戦記として「名人戦を観て」³（『将棋世界』四七年七月）と本文冒頭で小林と安吾が触れた「散る日本」（群

一、将棋は安吾研究の題材たりうるか

——木村名人が敗ける話、あれを私は読んだんだよ。（略）坂口安吾といふ人がよく現はれてると思つて、面白かつた。あゝいふことに対する一つの熾烈な興味があるんだな。つまりアツプ・ツウ・デイトのとき。（略）あゝいふものを活躍させる才能が君にはあるんだ。（略）「白痴」といふのは……。

——あれはいゝものぢやないよ、あんなものは……。『白痴』なんかよか、さつきの将棋の観戦記²みたいなもののはうが、かへつてゝいゝんぢやないかと思つてるよ。

坂口安吾が〈公式主義者〉小林秀雄を真つ向から批判した「教

像「四七年八月）を書いた。(2) に関しては(木村・升田戦の日の未明」と末尾に記した「坂口流の将棋観」⁴ (『夕刊新東海』四七年二月一日付(発行は前日))と対局の「観戦記」(『夕刊新東海』四八年一月三～二日付、「夕刊神港」同一～二日付、「九州タイムズ」同一～二日付、「夕刊ニイガタ」同一～二日付、「夕刊ひろしま」同六～二日付・各二〇回(休載日あり)が掲載⁵。(3)には「本因坊・呉清源十番碁観戦記」(『読売新聞』夕刊・四八年七月八～九日)で対局前夜および一日目を描写。「呉清源」(『文学界』四八年一〇月)で人物論を執筆。(4)には観戦記「勝負師」(『別冊文藝春秋』四九年(昭和二十四年)八月)を執筆した。

四局中三局までが将棋で、囲碁の一局はなぜか序盤までを描いた観戦記風エッセイだ。終局時に立会人が「白の目ないし二目勝ち」と異例の裁定を下し、のちにルールが整備されるきっかけとなった歴史的対局だが結末は描かれていない。

沢木耕太郎は「散る日本」を一貫して評価している。高田宏らとの座談会「ノンフィクションの可能性」(『新潮』八七年二月で(二十二歳以降に読んで何が印象に残ったかという(略)最初に読んで驚いたのは坂口安吾の「散る日本」です。(略)塚田と木村に対する思いが、日本の状況論というか、戦後の精神の有様にクロスしてくる。(略)文章が相当上等だと感じました。(略)自分が一人称で書いていく時の一つの祖型となり

ました」と語っている。沢木は(囲碁については川端康成の「名人」、将棋についてなら坂口安吾の「散る日本」という傑作ドキュメントを、ぼくらは持つている)(『路上の視野』より・八二年・文藝春秋)とも書き、彼の編集による「右か、左か―心に残る物語 日本文学秀作選」(二〇一〇年・文春文庫)には「散る日本」を収録した。

米長邦雄永世棋聖は「将棋年鑑 平成一一年度版」で(最近読んで感銘を受けた本)として「太宰治と坂口安吾の世界―逆のエチカ」(齋藤慎爾編集・九八年・司書房)を挙げた。九九年の東急将棋まつりの席上でこれに関して質問した筆者に「済寧館で木村が名人に返り咲いた後、安吾は木村、塚田、升田、大山(康晴)の誰と帰ったでしょう」と「勝負師」のラストについて逆質問した。「大山先生」との答えに「だから坂口安吾は本物なんです」と喝破した。米長は遺作「将棋の天才たち」(講談社・一三年)で「勝負師」での大山を取り上げた。

坂口安吾は太宰治、織田作之助らと共に「無頼派」と呼ばれて終戦直後に華々しく活躍した。「墮落論」「白痴」「風博士」「桜の森の満開の下」「不連続殺人事件」「信長」etc.とジャンルを超越して書きまくった安吾には今なお多くの愛読者が存在し、その作品と人物は研究の対象となり続けている。

ところが「散る日本」「勝負師」や「呉清源」といった将棋・

囲碁関連作品は二〇世紀の末頃までは論じられた形跡がない。関心ない、わからない、あるいは研究するに値しないとされていた節がある。講談社から出た「坂口安吾選集」（全二二巻・八二～八三年）⁶には将棋・囲碁関連作品がない。「済霊館の決戦」の終局直後に両対局者を升田、大山、そして安吾が囲んだ写真⁷（毎日新聞「四九年五月二六日」）は、多くの棋書に収録されているが、安吾関連書には見当たらない。〇〇年の「安吾忌」（二月一七日）で関係者や評論家に訊くと誰も知らなかった。小林らの発言を考えると、将棋・囲碁関連作品の無視により安吾の全体像には欠落もしくはひずみが生じているという思いが浮かんだ。

そんな中で出た筑摩書房の坂口安吾全集（第一～一七巻Ⅱ九八～〇〇年、別巻Ⅱ一二年、以下、筑摩版全集）は、将棋・囲碁関連の生前未発表作品や資料も多数掲載した。

筆者は前述の安吾忌後に編集部を訪問し、「散る日本」と「観戦記」取材メモが書かれた二冊の手帖を見る機会を得た。これをきっかけに「愛棋家 坂口安吾」と題した論考を将棋ペンクラブ会報「将棋ペン倶楽部」に発表した¹⁰。今回は一七年三月の「将棋と文学研究会」研究集会での「愛棋家 坂口安吾——その生涯・作品と将棋、『木村三部作』を中心に——」も含めて整理して、新たな視点から安吾と将棋の関わりを考える。

二．安吾は本当に将棋を知らなかったのか

安吾は囲碁愛好家として知られ、「囲碁修業」（「都新聞」三八年六月二（二三日）などの随筆で自らの熱中ぶりを語っている。生前、二段免状（昭和三五年一月八日付）を取得し、没後には三段免状（昭和三〇年五月三日付）を追贈されている。

呉清源との五子局の棋譜と観戦記（月刊読売）（四八年五月）¹¹も残っている。戦前に呉が川端康成ら文壇強豪を五子で負かしたのを覚えていた安吾は「六ツ置こう」と申し出た。呉は下手が当時から上達しているからと五子を主張し、押し切った。大きなハンデは格好悪く、負ければみつともない。「教祖の文学」には、安吾が小林と碁を打った際の（彼は五目置いて）ほんとともつと置く必要があるのだが、五ツ以上は恰好が悪いやと云つて置かない」という逸話が記された。アマは概して実力不相応の手合いを選びがちだ。見栄を張らずに六子を申し出た安吾に真の囲碁ファンの姿を見る。〈巨豪呉氏をしばしば長考させるなど熱戦四時間〉で安吾は白の大石を召し捕つたものの盤面およそ十目の差で敗れた。呉を長考させるだけのものが安吾にはあった。

一方で自らの将棋は（私も将棋は知らない）（「散る日本」）や〈私は将棋の駒の動き方を知ってるだけだ。（略）私はそのドン

ジリ、六十二級）（『巷談師』〈別冊文藝春秋〉五〇年八月）などひたすら無知ぶりを強調した。作品に棋譜の誤記が散見されるため、過去には筆者も〈将棋は知らない〉に領いてしまったのだが、果たしてそうだろうか。

塚田八段が六分考へて三四飛、横歩を払った。(略) 三十八手の勝負とどこで違つた手を指すか、どつちが指すか(略) 五六歩突き。それにきまつてゐるからその先を先の先まで読んでゐる由(略)「桂があるから、二四へ打つ。そんな手もあるぢやろ。いろいろと、むづかしいところぢや」。土居八段は満悦の様子である

(『散る日本』傍線部筆者)

安吾は的確に将棋用語を使っている。この点を将棋と文学研究会に角川文庫の「散る日本」(七三年)を持参した田丸昇九段¹²に伺つたところ首肯された。

安吾自身は「将棋を指した」と書かなかつたが、対局の証言はいくつか残っている。

木山捷平の「酔いざめ日記」(七五年・講談社)には、昭和十五年(四〇年)一月三日の欄に〈坪田、小田と小生の三人で中村地平訪問。坂口安吾も来ていた。将棋をさしたり、十二

時近く辞去。(略)坂口と一勝一敗。(略)真杉と一勝であつた¹³とある。

若園清太郎の「わが坂口安吾」(七六年・昭和出版)には、三五年、長野県奈良原鉱泉で将棋が強い若園と囲碁が強い安吾とで互いにハンデを与えて対局した話が出てくる。安吾は若園に二枚落ちでも、若園は六子置いても安吾に歯が立たなかつたという。

文壇チーム対抗戦の証言もある。木山と共に阿佐ヶ谷将棋会の常連だつた中村地平は「将棋随筆」(初出紙誌未詳三八年二月・「中村地平全集」第三卷七一年)で、竹村書房(安吾、菱山修三他)対阿佐ヶ谷チームの対抗戦が四谷の某料亭で行われたと書く。浅見淵の「昭和文壇側面史」(六八年・講談社)の〈竹村書房派と早稲田派〉には〈竹村書房を背景に(略)坂口安吾が総大将となつて早稲田組に挑戦を申し込んで来て、四谷見付の近くの長野屋という女気のない居酒屋風の飲み屋の二階で対戦した。(略)早稲田組の勝利で終つたが、そのあと、そこで竹村書房の奢りで大酒宴となつた〉とある。参加者記載は竹村組の安吾と若園のみだ。村上護の「文壇資料 阿佐ヶ谷界限」(七七年・講談社)は、若園の証言として本郷チーム(安吾、若園、菱山、鵜殿新一、真杉)と阿佐ヶ谷チーム(安成二郎、井伏鱒二、上林暁、木山、太宰治)が四谷の某料亭で対戦したと記した。安吾と太宰が指していたら面白いのだが、両者の年譜に記載がな

く、後年の証言で信憑性に欠けるのが残念。チーム名や参加者が微妙に異なるため、同じ対抗戦の記憶違いか別の対抗戦かは断定できないが、いずれも安吾側が惨敗となっている。

山本亨介(筆名・天狗太郎)の「将棋とつておきの話」(八七年・筑摩書房)には五一年頃に友人と共に、安吾が戦前に住んだ取手市に彼を訪ねた話がある。詩人の湯口三郎と安吾の将棋は湯口の圧勝で対局は一局のみ、あとは酒盛りになったという。

棋力はさておき、安吾は将棋記事を熟読した形跡がある。元祖「読む将」である。

昭和初期には新聞雑誌を通して囲碁将棋熱が文士にも波及していく。安吾も例外ではない。「生命拾ひをした話」(「囲碁春秋」四〇年一月)は「朝日新聞の八段位獲得戦木谷七段対久保松六段の対局で呉七段の解説」への疑問に寝食を忘れて没頭して生命の危険を感じたが、強豪知人を探し回って「呉七段の読違ひといふ結論に達し、僕は一命を拾った」という話。そこには「娯楽機関の何一つない田舎では、新聞を読むのが最大の娯楽である」とあらゆる記事を熟読する自身の姿も描いた。「横暴な新聞販売店」(生前未発表・四七年頃執筆と推定)には「朝日、毎日、読売、東京、時事の五紙を購読」とある。

安吾は「戦後文章論」(「新潮」五一年九月)で戦後の文章での新風として将棋の観戦記を挙げ、特に三象子(加藤治郎八段

五一年の第十期名人戦(木村対升田)で朝日新聞に全六局の観戦記を執筆を(文章が特に生きていて、いちじるしく活写の筆力が鋭い)と絶賛した。さらに当時伊東市在住の安吾は、静岡新聞の高柳(敏夫)八段を「淡々としながら、たくまぬような、しかし巧みなユーモアもあって、急所はピツタリ押えているし、田舎の新聞にはモツタイない逸材です」と賞賛した¹⁴のは将棋を熟読した証拠だ。

雑誌「文藝春秋」は創設者の菊池寛が大の将棋好きとあって将棋欄が充実していた。新進作家の安吾は戦前、同誌に「海の霧」(三二年九月)、「蟬」(三三年二月)¹⁵など四作を載せている。寄稿者である彼は定期的に目を通していた可能性が高い。

安吾は将棋を読んでいたからこそ将棋が書けた。安吾が逝去の二ヶ月前に発表した小説「桂馬の幻想」(「小説新潮」五四年一二月号)は将棋の天才木戸六段が主人公。名人候補津雲八段との一戦で木戸は(金をひいて守りをかためるか、歩をついて様子を見ればおだやかであるが、桂をはねだすと乱戦模様になる)と考えた。そして候補手のうち、「四五桂」を指した——特異な動きをする(桂馬)と(幻想)とを組み合わせた題名は秀逸だ。(金をひく)は済寧館の決戦の木村の守りの勝負手「四八金」を想起させる。桂を(はねだす)というのも適切だ。そして(四五桂)に注目したい。当初配置の二九(もしくは二二)

から三七（もしくは三三）經由で四五と正しい筋に桂馬を跳ねている。

「散る日本」では（将棋を知らない）に続いて（けれど、この十年間、名人戦ばかりでなく、その他の勝負、これといふ手合に殆ど負けてゐないのだから、調子だけでかうは行く筈のものではない。（略）木村名人はたしかに強いに相違ない（略）木村名人の一代前は関根名人と云つて、この人は将棋は弱かつたが、将棋がキレイで、さすがに名人の風格、などと称せられた」と記している。（将棋を知らない）とは書きながらも（両名人の強弱に多少の誇張はあるが）将棋界のあらましは把握している。実は同様のレトリックを安吾は唯一の肉声録音でも残している。「済寧館の決戦」直後の四九年六月六日にNHK第一放送の「朝の訪問」で「碁や将棋、特に将棋が非常にお好きなんです」との問いには「いえ、好きじゃないですよ。将棋は僕は下手なんです。碁の方がね、まあいくらかと言つたつて大してうまくないけどね」と言いながら直後に「（将棋は）勝負の決する最後の瞬間まで、もう鏝ぜり合いみないなもんです。その激しさというのは、僕なんかみたいな野次馬には観ていて、こんなに面白いものはないんですね」。（好きじゃない）けど（こんなに面白いものはない）とは安吾ならではの表現だ。

五四年二月三〇日、故郷に帰つた安吾は「新潟日報新館落成

記念文芸講演会」で畏友尾崎士郎と共に演台に上つた。二月一日付の同紙朝刊は（機知と熱の文学論／尾崎、坂口両氏講演会との見出しで（まず坂口氏が演台に立ち、大山氏に名人位を奪われた木村前名人の例を引き／形ち、姿、感情に重きをおいた木村の将棋は真理に重点をおく大山氏に敗れた。真理とはだれにでも判り易いものでなければならず、文学の底を貫くものは真理でなければならぬ。／と坂口文学の旗印を示せば（略）と報じた。翌年二月に亡くなる直前、生涯最後の講演で二年前（五二年）の名人戦を例にして文学を語つたことは、将棋に対する関心を最期まで持ち続けていた何よりの証拠だ。

三．安吾はなぜ木村義雄を書いたのか

安吾は将棋観戦記を書いた明確な理由を残している。

（この創作集は私の将棋名人戦ならびにその他、自ら意志してそれを目撃したいくつかの棋士たちの心血をそ、ぐ対局から、特に重大なもの、みを選んで一本としたものである。／主として、将棋名人戦が主題になつてゐるが、私自身は、むしろ囲碁にいきさ、かのタシナミがあり、将棋の方は縁台将棋のピリに列るのがやうやくである。／私は然し、内に全力を尽し、血肉を賭けて闘われる将棋名人戦を好む）から始まる、生前未発

表となった「後記」（筑摩版全集第一五巻）である。

また「碁にも名人戦つくれ」（毎日新聞大阪版）四九年六月二九日付）では（将棋の人氣はいうまでもなく実力第一人者を争う名人戦の人氣である。（略）碁の本因坊戦ときてはたかが一家名をつぐだけのことにすぎない。（略）碁も名人戦をやらねばならぬ。実力第一人者を争うギリギリの勝負でなければ決して天下の人氣をわかすことはできない」と囲碁界に手厳しい。安吾は（私は碁の大手合は時々見た」と「散る日本」に記したが、観戦記を残していない。観戦記は書く必然性があつたから書いたのだ。

安吾の将棋観戦記はすべて木村義雄が対局者だ。「散る日本」「勝負師」は名人戦が舞台なので当然だが、共に頼まれ仕事ではなく、自主的に観戦に出かけて文芸誌に執筆している。木村に惹かれたからこそ名人戦に価値を見いだしたとも言えるだろう。安吾は「文藝春秋」三九年三月号に木村が書いた「双葉山の敗因考察」（目次では「将棋と双葉山の敗因」を間違いなく読んだ。同年初場所での双葉山の七十連勝成らずの敗因を分析した一文だ。「散る日本」に〈相撲のケンリ〉との一節が出てくるが、木村はその場所も初日から升席に通い、三日目、六十九連勝目の駒ノ里戦も観ている。連勝が途絶えた四日目の安藝ノ海戦は所用のため観られなかったのだが、それまでの観戦から双葉山の敗因を詳細に考察している。いわく〈横綱の面目の為に、

成るべく待ったをせず、多少不利でも受けて立つといふ觀念が、病後の彼れに意外の重荷を負はした）〈横綱の貫禄も大切ではあるが、それは決して呼吸が合はないでも、無理に立つことを要求するものではない〉（将棋は序盤に有利な陣を布いて、中盤の戦闘時期に入る準備をなすのが必要（略）序盤の岐れが互角でない、後がなかなか面倒）（立上がりの綺麗といふことも程度の問題で、彼れの後援者や輩員が、無暗に立ちを急がせて、彼れの成績を汚してはならぬ」と双葉山の立ち合いについて疑義を呈している。双葉山の「後の先」の立ち合いは強さと美しさを兼ね備えていると賞賛されていた¹⁶。連勝は三六年初場所から始まった。一方で「第一期名人決定大棋戦」は三五年から三七年の暮れにかけて行われ、木村が初の実力制名人に就いた。既に神格視されていた双葉山への批判は同時代の覇者である木村以外に許されることではない。木村は同誌の三八年一〇月号でも「将棋と戦略」で将棋の実際の読みを孫子の兵法などを例に挙げながら説いている。

感心した安吾はその後、たびたび木村について言及している。

木村名人の相撲観を読んだことがあるが、相撲を将棋の立場から判断してやつてゐた。流石に名人である。

「大井廣介といふ男」（現代文学）四二年九月

将棋の木村名人は不世出の名人と言はれ、生きながらにしてかういふ評価を持つことは凡そあらゆる芸界に於いて極めて稀れなことであるが、全く彼は心身あげて盤上にのたくり廻るといふ毒々しいまでに驚くべき闘志をもつた男である。

「青春論」〔文学界〕四二年一一・二二月

木村名人が双葉山を評して、将棋では序盤に位負けすると最後まで押されて負けてしまふ。名人だなどと云つても序盤で立ちおかれてはそれまで（略）双葉の如く、敵の声で立上り、敵に立上りの優位を与へるのが横綱たるの貫禄だといふ考へ方はどうかと思ふ、といふことを述べてゐた。

「大阪の反逆」〔改造〕四七年四月

往年木村名人が覇氣横溢のころ双葉山を評して、将棋は序盤に負けると勝負に負ける。序盤に位を制することが名人横綱たる技術でもあるのだから、敵の声に立ち上るのは解せない、と言つた。この心構へを名人はずでに自ら見失ひ、自ら逆に双葉山の愚に化してゐた。

「散る日本」〔群像〕四七年八月

安吾は戦時中、大井が主幹の同人誌「現代文学」¹⁷に精力的

に作品を発表した。同誌に発表された「日本文化私観」（四二年三月）は（見たところのスマートだけでは、真に美なる物とはなり得ない。すべては、実質の問題だ。美しさのための美しさは素直でなく、結局、本当の物ではない（略）法隆寺も平等院も焼けてしまつて一向に困らぬ。必要ならば、法隆寺をとりこわして停車場をつくるがいい」と（実質の問題）を語る。「散る日本」の最後の一文（実質だけが全部なのだ）に先駆けている。「大井廣介といふ男」で安吾は（彼の評論にはバルザックの隣に安藝の海が現れ、野球もレビユーも忍術も知つてゐることがみんな出てくる。これは非常にいゝ所だと僕は思ふ（略）生活の全部が文学の中へ現れてくる）多様性を褒め、本因坊秀哉が生活のすべてを碁に結びつけて考えている点を至言として、さらに木村を例に引く。（相撲を将棋の立場から判断）とは「双葉山の敗因考察」そのものだ。

「青春論」の「三 宮本武蔵」で安吾は、若き日の武蔵の死に物狂いの闘いを賞賛した。そして木村を若き日の武蔵に比類する者として共感をもつて描いている。

そして「大阪の反逆」。四七年の初めに急逝した織田作之助を悼んで書かれた評論だ。織田の「可能性の文学」〔改造〕四六年二月は坂田八段の端歩（九四歩）を題材にしている。（坂

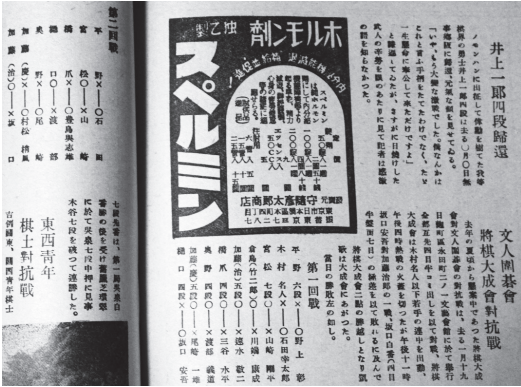
田の端の歩突きは、いかに阿呆な手であったにしろ、常に横紙破りの将棋をさして来た坂田の青春の手であった。(略) この手は将棋の定跡というオルソドックスに対する坂田の挑戦であった」と肯定的に捉えている。

「大阪の反逆」が〈将棋の升田七段が木村名人に三連勝以来、大阪の反逆といふやうなことが、時々新聞雑誌に現れはじめた〉と大阪期待の将棋指しから始まるのは、坂田から文学を論じた織田へのこの上ない手向けだ。一方で〈升田七段の攻撃速度は迅速意外で、従来の定跡が手おくれになつてしまふ(時事新報)との〈速度〉への言及は「坂田の端歩」否定の伏線として効果的である。安吾は〈最初の一手に端歩をついたといふ銜気の方が面白い。第一局に負けて、第二局で、又懲りもせず、端歩をついたといふ馬鹿な意地が面白い〉とまずは面白がるが、木村の〈名人だなどと云つても序盤で立ちおくれではそれまでで、(略) 双葉の如く、敵の声で立上り、敵に立上りの優位を与へるのが横綱たるの貫禄だといふ考へ方はどうかと思ふ〉を例に引き、〈第一手に端歩をつくなどといふのは馬鹿げたことだ〉と否定した。そして〈私は先に坂田八段の端歩のことを言つた。これは如何にも大阪的だ。然し、大阪の良さではなく、大阪の悪さだ。(略) なぜなら、木村名人の序盤に位負けしては勝負に負ける、序盤に位勝ちすること自体が力量の優位なのだから、

といふオルソドックスの前では当然敗北すべき素朴なハッターにすぎない〉と続けた。果たして安吾は〈織田は悲しい男であつた。彼はあまりにも、ふるさと、大阪を意識しすぎたのである。ありあまる才能を持ちながら、大阪に限定されてしまつた。彼は坂田八段の端歩を再現してゐる〉と木村の双葉山論と坂田の端歩との対比により織田を語つた。安吾が将棋を識つていたからこそ織田への挽歌である。

また、安吾は織田の「可能性の文学」を読んで、木村の言う序盤の立ち遅れが「坂田の端歩」を示唆していることに気づいたのではないか。先に挙げた「大井廣介といふ男」「青春論」には双葉山の名前はない。将棋の「序盤の不利」と「双葉山の立ち遅れ」を結びつけて「坂田の端歩」を論じたのは「大阪の反逆」が初めてだ。坂田が「南禅寺の決戦」で九四歩を指したのは「双葉山の敗因考察」の二年前。木村はあからさまに実名を記すのは控えたが、「序盤の不利」が「坂田の端歩」を示すと考えるのは不自然ではない。安吾が木村の双葉山論における将棋の「序盤の不利」＝「坂田の端歩」であることを認識したのは、織田の「可能性の文学」のおかげだ。

「散る日本」の終わり間際で安吾は一転して木村を痛烈に批判する。それまで安吾は木村を文学と将棋と道は違えども同じ志を持っていると思つていた。木村の敗北は「双葉山の敗因考



「察」で自身が指摘した（双葉山の愚）そのものだ。言っていることとやっていることが違う！思い入れが強かったからこそ裏切られたと感じ、怒りはすさまじかったのだ。木村を（双葉山の愚に化してゐた）と罵倒したのは愛情の裏返しだ。

二人は戦前の文人囲碁会（創立大会は三八年四月二一日）で恐らく面識があった。

四〇年一月一九日には「文人囲碁会将棋大成会対抗戦」が開催された。文人側からは安吾や川端康成ら、大成会側からは木

村名人、倉島竹二郎が参加し、（午後十一時坂口安吾対加藤治郎の一戦、坂口白番（四目半盤面七目）の極差を以て敗れるに及んで将棋大成會二點の勝越しとなり凱歌は大成會にあがつた）（「囲碁春秋」¹⁸四〇年二月号）。

安吾は戦後、随筆「文人囲碁会」（「ユーモア」四七年一月）で（僕

が今迄他流試合をして、その凶々しさに呆れたのは将棋さしのチームであった。（略）木村名人が初段で最も強く、あとは大概、三四級というところだが、彼らは碁と将棋は違っても盤面に向う商売なのだから、第一に場馴れており、勝負のコツは、先ず相手を呑んでかゝることだという勝負の大原則を心得ている（略）僕が碁に負けて口惜しいと思ったのは、この将棋の連中で、いつか復讐戦をやりたいと思っているのも、この連中だけだ」と回想した。自分の負けがチームの負けに直結して悔しくない訳がない。

のちに「散る日本」での対局開始直後に（木村名人は私達に向つて、あなた方は洋服だし先が長いことだからどうぞお楽に、と言つたりする）と気さくだったのは、過去に接点があったからだろう。「観戦記」では（私たちも寝ようとする、木村前名人、私のところに遊びにきた。／そこで、私が釈迦に説法という奴だが、色々和心理的な見方から勝負ということの本質について、一席またアジルところがあった。（略）将棋は、勝負は、これ又常に創作である。（略）将棋というものを何も知らない私が、天下の前名人に三十分ほど将棋の講釈をしたのだから笑わせるが、これも酒のせいである」と記した。「明日は天気になれ」（「西日本新聞」五三年一月二日〜四月二三日付）の「立ち直り試合」では名古屋での対局を回想して（私がこの観戦記を引き受けたの

は、ひとつは木村になんとか罪ほろぼしをしたいような気持ちのせいがあった。／私は木村が塚田に敗れて名人位を失った一局を観戦して、木村敗戦の有様をツブサに描写したことがある。(略) 木村が気持ちの上でダメになった原因の一部には、私の冷酷な文章が含まれているような気がして、なんとなく気が咎めておったのである(略) なんとかして木村を升田に勝たせ、その勝利の姿を描写して罪ほろぼしをしてやりたい」と木村への親近感は一貫していた。

安吾は囲碁では呉清源を高く評価していた。「呉清源」(「文学界」四八年一〇月、のちに「呉清源論」に改題)で、木村、升田が度々自滅することに触れた上で(それらの日本的な勝負の鬼どもに比べて、なんとまア呉清源は、完全なる鬼であり、そして、完全に人間ではないことよ)と感嘆している。ただし(完全なる鬼)に感心したが「人間」呉清源には評価を濁している。「呉清源」の結びは(呉清源がジコーサマ¹⁹)に入門せざるを得なかったのも、天才の悲劇的な宿命であったろうと私は思う。「勝負師」の冒頭でも川端康成らと共に呉を囲んだ席で安吾は(要領を得ない座談会²⁰で、面白をかくしくもなく、後味がわるかった。告白狂じみた我々文士とちがつて、呉八段がとめて傷口にふれたくない気持はわかるのであるが、もつと気楽に、言ひきれたら、彼の大成のために却つて良からう、と私には思はれた)

と呉の翳を指摘している。

木村は「済寧館の決戦」の自戦記(名人木村義雄実戦集 巻七)末尾に(梅原龍三郎先生、志賀直哉先生、村松梢風先生、坂口安吾先生その他多くのファンの方々の暖い御援助を生涯忘れてはならないと胸に深く刻み込んでいる)と記した。坂口家には見返しに「昭和二十四年夏／著者 木村義雄／敬呈／坂口安吾先生」と墨跡鮮やかに記された「これを読めば必ず強くなる最新将棋必勝法」(四九年・世界社)が遺された。木村もまた安吾が好きだったのだろう。

四 「勝負師」をめぐる

「評伝坂口安吾 魂の事件簿」(〇二年・集英社)を著した七北数人は「勝負師」を(一種の将棋観戦記だが、棋士の内面にも筆が及び、知らぬ間に人生論にまで進んでいくので、小説的な要素も多分にある。安吾の作家魂みたいなものがギョツと詰まった傑作で、安吾を知りたい人にはまずこれを薦めることにしている)(「火だるま安吾」(三三)変わらぬ「勝負師」像「中日新聞」〇五年三月一四日付)と高く評価している。

二〇一九年は「済寧館の決戦」から七〇年。記念すべき年を前に一八年四月、中公文庫「勝負師 将棋・囲碁作品集」が出

た。「木村三部作」とも呼ばれるべき三作（木村義雄が名人位から転落した「散る日本」、再起を図った「観戦記」、名人位に返り咲いた「勝負師」）が初めて一冊に収められた。巻末エッセイに沢木耕太郎が「散る日本」に触れた「私だけの教科書」〔象が空を〕に収録（九三年・文藝春秋）があるのは気が利いている。前述の「後記」が入っていない、作品の並びが時系列ではない、補注がないなどの残念な点はあるが、その意義は大きい。

実は「勝負師」には、あらゆる関連資料が残っている。

- (1) 取材メモが記された手帖（安吾遺品・新潟市所蔵）
- (2) 自筆原稿（安吾遺品・新潟市所蔵）
- (3) 初出誌「別冊 文藝春秋」〔第二号〕夏の小説集（四九年八月）
- (4) 作品集「勝負師」（五〇年一月三二日発行・作品社・著者旧蔵・東洋大学附属図書館蔵）
- (5) 後記（生前未発表・筑摩版全集第一五巻）
- (6) 作品集についての詫び状（二通・安吾遺品・新潟市所蔵）
- (7) 談話（「毎日新聞」四九年五月二六日付、「将棋新聞」第二九号〔復刊第六号〕六月一五日号）
- (8) 写真（「済寧館の決戦」終局直後および開始時、控え室などで安吾の姿あり）
- (9) インタビュー録音（四九年六月六日・NHK第一放送「朝の訪問」聞き手・坂口英一郎アナウンサー・筑摩版全集第一七巻）

(1) の手帖は革装丁で手のひら大の鎌倉文庫の「文庫手帖」四九年版。見開きの手帖の無地欄を九〇度回転させて一四ページにわたって鉛筆で縦に殴り書きしている。坂口家が〇五年二月に新潟市に寄贈し、同市「安吾 風の館」（〇九年七月開館）で時折展示している。なお「散る日本」取材メモも「文庫手帖」四七年版に記されている。四四ページにわたって鉛筆書きされ、不鮮明さを補うため万年筆での上書きがある。こちらには（木村義雄 北多摩郡府中町分梅／塚田正夫 杉並区大宮前／加藤治郎 港区芝小山町／倉島竹二郎 鎌倉市腰越町）と「将棋関係者住所（筑摩版全集未収録）」の記載あり。

(2) は安吾没後に出版社から遺族に返却され、手帖と同様に遺族が新潟市に寄贈した。達筆ではないが万年筆で「無頼派」らしからぬ（？）丁寧な丸文字風で読みやすい筆跡。他にいくつか発見。①最終段落（木村と塚田は自動車で帰った）の直前の（升田は木村の前にすすみでて、／「これで木村名人は歴史に残る人となった。名人位をとり返さな、歴史に残らん」／斜にかまえてガラガラと力一杯の大声。宣告しているようである。神がかり、歴史がかり、というのだろう）は、取材メモ、自筆原稿、初出誌にはない。初出作品集だけに存在。②最後の一文で大山を描いた（この小男の勝負度胸が）は（この小男の平静な勝負師が）（傍線は筆者）に書き直された。これを見て本文

中の〈勝負師〉の登場回数を確認したところ、一二回のうち木村を示しているのは、たったの一回。何と大山が八回。回数だけで言えば〈勝負師〉は大山なのだ（残りは〈勝負師〉としての魂胆が弱い）とされた（東京方の原田（泰夫）八段²¹、一般名詞としての登場、控え室の面々が各一回）。

（3）中篇小说特輯の一つとして掲載。目次で隣にあるのは井伏鱒二の「本日休診」。

（4）全七篇収録の中短編集。「勝負師」以外は普通の小説、随筆。安吾が細字万年筆の青インクで白地の見返しに左ページに〈筆者自家用／門外不出〉との書き込みがあった。安吾は五一年に税金未払いにより原稿料や蔵書の差し押さえを喰っている。その中の一冊が巡り巡って母校東洋大に納まったと推察される。「勝負師」本文にも二カ所の書き込みあり。①中公文庫「勝負師」で九〇ページの〈塚田の指手が報らしてきた。／六六歩〉（木村はそれをノータイムで、同歩）とある行から一二行先、九一ページの〈持ち時間があといくらかもない木村が、又、長考にはいる〉の右側に見返しと同じ青インクで線が引かれ、その右上に〈次は塚田の／指手なる／べし？〉との書き込みあり。木村の同歩の直後なので、確かに長考は塚田でなくてはならない。②同九五ページの〈木村、四十九分考へて、四五金〉とあるうち〈木村〉の右側に線が引かれ、そこからの指示線の

先に〈塚田？〉と書き込まれていた。九〇ページの〈木村〉の同歩の直後の手なので〈塚田〉が正しい。七篇のうち書き込みがあるのは「勝負師」だけ。安吾が自作を読み返したこと、自分が書いた手番の誤りに気づく程度の棋力があることを証明している。

（5）作品集「勝負師」は本来、観戦記集として出版されるはずだった。先に「後記」の冒頭を挙げたが、ここでは末尾を紹介する。〈私は鬪争の美しさを好む。好むのあまり、やむべからずして書いたものが、この一冊の本である。ねがはくは読者よ、鬪争を愛するはよし、正しく健康に愛し、合理的に処理して、再び戦争の愚をくりかへすことを、激しく憎もうではないか。／健全なる鬪争に美神の宿らんことを。／一九四九・八・十六 著者〉。格調高く結ばれている。もし「後記」が載った観戦記集が安吾の意図の通りに出していたら、これらの作品群はもつと陽の当たる場所にあつたに違いない。

（6）「勝負師」が、安吾の本来の意図とは違った作品集になった理由は「後記」と二通の詫び状から推察できる。作品社社主の山内文三からの五〇年一月二三日付の書簡は〈御叱正の御業書頂戴致し早速八木岡を参上せしめ御詫申上候処御寛容をお図り賜り御厚情のほど御礼申上候〉。書簡中に出てくる同社の編集者である八木岡英治からは二月五日付で〈勝負師十部別便で

御送り申しましたから御嘉納くださるよう御願ひ申上ます。／＼大変遅延いたしました上、ご満足いたゞけるやうなものを作ることが出来ず何と御詫び申上てよいか分りません。二通とも安吾が作品集に不満があつたとわかる文面だ。また八木岡の文中の「十冊」のうちの一冊が現在、安吾母校に収蔵されていると推察される。

(7) 毎日新聞〈将棋の下手な自分は将棋そのものでなしに人間の心理的摩擦といつたものを見たくて観戦しているが、木村は和らいだといつていいほど澄んだ気持ちに終始していたし、夜になつても疲労がみえなかつたのは彼が自己のペースのまま無理なく進んでいたからだと思う、これに比べて塚田には心理的な焦りがあるせいかな、何か感じが固く、自分を有利にしようと思つて意識する個所でかえつて破たんを招いていたと思う〉、将棋新聞〈きよう観戦していて感じたことは木村さんの気持が澄み切つていたことだつた、五手目に木村さんは三十三分の長考にふけつたが、あれは恐らく手を読んだのでなく、落ち着きを取ろうとして努力したものだと思像される、そしてそれ以後はときどきボクに話しかけたりして、らかな気持で指していたようだが、これとアベコベにきよの塚田さんはコチコチに固くなりすぎていたように思つた、そして恐らくこの気持をほぐそうと努力されたのであろうが、ほぐれて来なかつたようだが、こゝら

にも勝敗がある程度支配するものがあつたのではなからうか。

(8) 「サン写真新聞」(四九年五月二六日付) ほか。

(9) 前述。過去にカセットテープ、CD化。

ここまで関連資料が揃つている作品は稀だ。格好の研究題材であることは疑いない。

安吾は「大井廣介といふ男」で、大井を〈野球もレビューも忍術も知つてゐることがみんな出てくる。これは非常にい、所だと僕は思ふ(略)生活の全部が文学の中へ現れてくる〉と評した。これは安吾にも当てはまる。将棋は彼の文学の中に現れている。

1 NHK将棋講座に観戦記を執筆した同姓同名氏は別人。

2 研究会の筆者発表で「安吾が書いたのは観戦記か?」という問題提起があつた。「定本坂口安吾全集」(全一三巻・六七年〜七一年・冬樹社)は「散る日本」「勝負師」を小説に、「観戦記」を評論に分類する。観戦記の枠を越えているという考えもあるが、ここではまとめて観戦記として扱う。

3 安吾は講演「名人戦をみて」を行った(坂口安吾デジタルミュージアム年譜〈七北数人作成 未掲載〉。「毎日新聞」四七年六月一日付の「将棋名人戦を語る会」(二二日午後五時三〇分)・

- 毎日ホール)で告知。「将棋新聞」第七号(四七年七月中旬号・将棋大成会)の「名人戦講演会」報告に安吾の登壇記録あり。「名人戦を観て」は他者筆記の講演記録を転用した可能性がある。
- 4 従来は初出未詳。筆者が将棋ペンクラブ会報「将棋ペン倶楽部(以下、倶楽部)」(下)①(一一年・春Ⅱ第五号)で報告。同作は「将棋新聞」第一四号(四八年三月一日)に「私の将棋観」名で転載。従来は初出未詳。「夕刊新東海」「夕刊神港」「九州タイムズ」は筆者が倶楽部(下)①、(下)⑦(一四年・春Ⅱ第八号)、(下)⑨(一七年・秋Ⅱ第六八号)で、斎藤理生大阪大学准教授が「安吾・新興紙・棋戦ー「坂口流の将棋」『観戦記』初出をめぐる」(「坂口安吾研究」第二号・一六年春)で報告。「夕刊ニイガタ」「夕刊ひろしま」は筆者が倶楽部(下)⑨で報告。
- 6 筆者は二〇年ほど前、桜上水駅近くのそば屋に居合わせた編者の野坂昭如に選集について尋ねたことあり。「河出だったっけ?いい加減なものでね」と返された。出版社が違う、確かに……。
- 7 近年、新潟市「安吾風の館」の安吾遺品からも発見。「安吾の将棋観戦記」展(一七年二月・一八年三月)でチラシに使用。
- 8 「名人木村義雄実戦集 巻七」(八一年・大修館書店)ほか。
- 9 「散る日本」の初出誌三手目「五六歩」は取材メモでは「二六歩」。「勝負師」でのいくつかの棋譜誤記も編集部に伝えた。指摘内容と将棋ペンクラブ会員の筆者名が筑摩版全集第一六巻に掲載。
- 10 国会図書館に収蔵。(上)(〇〇年・春Ⅱ第三号) (下)最終回(一八年・春Ⅱ第六九号)、外伝(一〇年・秋Ⅱ第五四号)を断続的に計一三回掲載。
- 11 PDFのご希望は筆者まで(shunchan1964@yahoo.co.jp)。
- 12 「将棋世界」(九一年六月)の升田幸三追悼号の表紙は偶然、濟寧館内部。「将棋のある風景④皇居濟寧館の雨」には、写真:森信雄、文:大崎善生、編集長の田丸七段(立時)と豪華メンバーが集結。坪田(讓治)、小田(嶽夫)、「城外」で第三回芥川賞を受賞。真杉(静枝)は当時中村と同居。いずれも文学仲間。
- 13 安吾の慧眼畏るべし。のちに加藤名誉九段は将棋ペンクラブ初代名誉会長。高柳名誉九段は第一回将棋ペンクラブ大賞受賞者。共に若くして引退、文筆家として活躍した。
- 14 同じ号には倉島竹二郎の「ひつくりかへつてゐる兄」も掲載。双葉山は幼少時に吹き矢で右目を負傷、ほとんど失明状態だったので激しい相撲は取りづらく、後の先の立ち合いになったという説あり。
- 15 発行の大観堂は古書店兼出版業。アンドレ・モーロワの「フランス敗れたり」(四〇年)が二〇〇刷を超える大ベストセラーとなった。文士のパトロンの存在で店主の北原義太郎いわく「借金の大豪傑は安吾さん、檀(一雄)さん、それにあなた(尾崎一雄)」。新宿区に新刊書店として現存。最近気づいたが、筆者の自宅への大学合格連絡はこの店先の赤電話からだった。
- 16 主幹の安永一は本因坊秀哉門下の在野の棋客。「勝負師」にへ素人五段の安永君」として登場。
- 17 靈光様(靈光尊)。靈字教教祖。呉は一時期、双葉山と共に信者だった。
- 18 「開暮・人生・神様」(「文藝春秋」四九年七月)。参加者は他に豊島与志雄、火野葦平。
- 19 実は安吾と同じ新潟県人。〇一年、筆者は原田九段に「勝負師」を読んでもらい感想を聞いた。答えは一言、「安吾先生のおっしゃる通り」。
- 20 「将棋ペンクラブ・安吾の会」